
真説・恋姫†無双 ～その男荀攸につき～

八チ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真説・恋姫十無双 ～その男荀攸につき～

【Nコード】

N2352Y

【作者名】

八手

【あらすじ】

この物語は愛が一割、シリアス一割、残り全てはお笑いで出来ております。

主人公の名は『荀攸』彼の目指す先には何が待っているのだろうか？

第一話 別離（前書き）

よろしくお願いします。

第一話 別離

「まだ走れるか？」

「はあ、はあ……」

一組の少年と少女が森の中を走っていた。その二人から少し離れたところからは複数人の男性の声が聞こえてくる。

少年は、徐々に近づいてくる声を気にしながら、いまだ息を整えることのできない少女に視線を移し、このままでは二人とも男たちに捕まってしまうだろうと考える。

「私…、置いて、逃げ…、て…」

どうにかして二人とも助かる方法を考えていた少年だったが、不意に少女がそんなことを言い出した。だが、少年はいつかは少女がそう言い出すだろうと考えていたし、勿論そんなことをしようとも思わなかった。

逆に、少女のその一言で決意を固めた。

「いいか？ 今から俺があいつらを足止めするからお前は逃げるんだ。絶対にお前が親父たちのところに行くまでは足止めてみせるから、振り返らず何も考えないで走っていけ」

「そっ、いいから！ 俺の言うことをきいてくれ！」 出来ない…、一人だけで逃げるなんて…、出来ない！」

少女は自分だけ逃げるなんてことは出来ない、少年の服の端をつかみ離そうとしなかった。だが、徐々に聞こえてくる声は大きくな

っており、このままでは二人とも捕まり人買いにでも売られてしま
うだろう。

「桂花、頼むよ…。俺はお前が酷い目にあうのなんて嫌なんだよ…」

「嫌…、桂が残るなら私も残る！」

「桂花…」

少女の言葉に少年は喜びで胸が詰まりそうになる。だが、今は喜ん
でいる場合ではなく声は一段と近くまで近づいてきていた。

「桂花…」

少年はやさしく少女の名前を呼び、その唇に自分の唇を重ねる。突
然のことに少女は最初何が起こったのか理解できなかったようだが、
すぐに自分が何をされたのか気がつき顔を真っ赤にした。

「好きだよ桂花…、愛してる。俺も後から絶対に追いつくから、俺
が足止めしている間に街まで走れるな？」

「…、約束、約束だからね！ 破ったら…、嫌いになるんだから！」

「ああ、絶対だ！ いけ！」

少年に背を押され、少女は涙を流しながら走りだした。少女が走り
だしたのを確認した少年は、少女のために少しでも男たちを足止め
するために行動を開始する。

二人を追っているのはこの辺を根城にしている賊であり、少なく見
積もっても十人以上が自分たちを追ってきていた。

最初、馬に乗っている者もいたが馬が入れないようもありに逃げ込んだお陰で今現在追ってきている者は馬には乗っていなかった。

「絶対に桂花には手を出させない…」

少年はそう呟くと最近使えるようになった気を体全体に巡らせ身体強化をする。少年が気を使えるようになってから日も浅く、使った後は必ずと喋っていたいほど気を失ってしまうのだった。

さらに、気で身体能力を上げたからといって、まだ十になったばかりの少年が大の男五人以上を相手にして勝てるとも思えなかった。だが少なくとも何人かは倒すことが出来、その分だけ少女が逃げる時間を稼ぐことが出来るだろうことは間違いなかった。

「こつちだ、餓鬼がいやがつたぞ！」

そして、賊が少年に追いついてきた。賊は少年が逃げるのをあきらめたと思いつき、厭らしい笑いを浮かべながらゆっくりと少年に近づき…。

「手間かけさせやつ！？」

次の瞬間に、数メートル後ろに殴り飛ばされていた。突然のことに対応出来ない賊に少年はさらに追い討ちをかけ、地面に尻餅をついている賊の顔面めがけ全力で蹴りを食らわせ、その一撃を食らった賊はさらに数メートル吹き飛ばされ、少しの間痙攣していたがすぐにそのまま動かなくなった。

「お頭！ 一人餓鬼にやられましたぜ！」

そして遅れてやってきたほかの賊が仲間がやられたことを、自分た

ちのリーダーに伝える。

「餓鬼だと思つて油断しやがったな、阿呆が。それにしても、餓鬼の癖にやるじゃねーか。だが、大人しくつかまつとけば、痛い目を見ないですんだものを…。手前ら、手足は折つてもかまわねえ、顔とあそこさえ無事ならこれだけの上玉だ、男でも高い値がつくからな」

「くくへい！」「く」

その男の命令に従い、三人の男たちが少年を捕まえようと三方向から徐々に近づき、それにあわせて少年はじりじりと後ろに下がっていく。

「どうした？ 怖くなったのか？」

「…」

「へっ、怖くなって声もでねえ！」

賊が何か言うのを最後まで聞かず、少年はいきなり後ろに向かつて走り出し、それを追うようにして三人の賊が走り出した。

だが、少年は一本の木の幹を蹴ると、そのままバク転の要領で三人の後ろに回りこみ、真ん中にいる一人を右側にいる賊に向かって蹴り飛ばし、すぐさま残りの一人の足を払いその場に転倒させ、また走り出した。

「何もたまたしてやがる！ 追っぞ！」

お頭の声に三人は慌てて起き上がると、お頭と一緒に少年の後を追

いかけるのだった。

それから三十分が経過したころ、少年は崖の端にまで追い詰められていた。さらには気の使いすぎにより立っているのもやっとの状態であり、これ以上は逃げられそうにもなかった。

「手間かけさせやがって…、少しばかり教育が必要なようだな。大人をおちよくるとどうなるか…、しっかりと体に覚えさせてやるぜ」
そういつてお頭がゆっくりと近づいてくる。だが、少年にとってはこの後自分がどうなるとそんなことはどうでもよかった。これだけ時間を稼げたのだから。

お頭は少年に近づくと髪をつかんで下を向いている少年を顔を上げさせ、少年の目に映った男の顔には厭らしい笑みが浮かんでいるのだった。

「安心しな、一緒にいた女もあとで必ず捕まえてやる」

その言葉を聞き少年は男の顔を睨み付ける。

「ほう、まだそんな顔が出来るのか？ そうだな、なんならお前の前であの女を犯してやろうか？」

「…」

「なんだ？ 声が小さくて聞こえねえぞ？」

「あなた、には…、むりだよ」

少年の言葉を聴いてお頭は怪訝そうな顔をするが、次の瞬間少年が

どこにそんな力が残っていたのかというほどの力を出し、お頭の腰に手を回し走り出していた。

「あんたは俺と一緒にここから落ちるんだからな！」

「てめえ！」

御頭は少年の手を振りほどこうとしたが、予想以上の力でしがみ付かれている為に振りほどくことが出来ず、慌てて腰から短刀を抜くと少年の顔目掛け斬りつけた。

「！！」

かけていた眼鏡をはじかれ、さらには顔を切られた少年はそれでもしがみついている手を離さず、そのままの勢いのまま崖へと飛び出していくのだった。

崖から落ちながら少年は安堵していた。少女を守れたこと、少年にとってそれをなし得たことが何よりもうれしかった。

だが、たった一つだけ気がかりなことがあった。それは少女との約束を破ったことである。

「ははっ…、桂花に、嫌われ、るな…」

それだけを呟いた後少年は意識を失い、そのまま下を流れる川へと身を落とすのであった。

数十分後、少女は街から兵隊を連れて森へと戻ってきていた。だが、

そこにはぞ一人の賊の死体と、少し離れた崖に少量の血痕、それと眼鏡だけが残されていた。

「嘘つき…、絶対戻ってくるって言っただじゃない…。嘘、ついたら…、嫌いになるって言っただじゃない…」

少女は少年尾の眼鏡を胸に抱き涙を流す。少年の家族や少女の家族、さらには兵たちも少年を探していたが生存確認はおろか、遺体すらも発見できていなかった。

「嫌いに、なつてやるんだから…！ あたしとの約束を破る桂なんて…、大嫌いなんだから！ あたしのこと好きって言っただのに、愛してるって言っただじゃない！」

少女の慟哭は、彼女の両親が来るまで終わることはなかった。

少年の名は荀攸公達 真名を桂と言う。

少女の名は荀文若 真名を桂花と言う。

二人は同じ場所、同じ日、同じ時間に生をつけ、常に一緒に行動していた。母親同士が中がよいこともあり本当の家族のように育ってきた。

幼くして、才能を開花させた二人を周囲は神童と呼び、二人はそれ以上に努力をしてきた。二人は同じ時間を過ごし、同じ歴史を歩むものだと周囲も、本人たちもそう思っていた。このときまでは…。

少女と少年の時間は引き裂かれ、少年はいずこかへと消えてしまい、少年と少女が再びその時を共有するまでには数年の時を必要とするのだった。

時は後漢末期、世は徐々に乱れを見せ始め、時代は英雄を求めよう

としていた。正しき道を外れた歴史は、この先人々に何をみせ何を
させようとするのだろうか？

第一話 別離（後書き）

いかがでしたでしょうか？

第二話 今の日常（前書き）

第二話です

第二話 今の日常

「!!!??？」

声にならない悲鳴を上げながら人が水平に吹き飛ばされていた。そして、地面に叩きつけられ二回三回とゴムマリののようにバウンドし、さらに地面を十メートルほど滑りその先にあった柱に激突してやっ
と止まった。

「ちよ、さすがにそれはやり過ぎちゃうか、恋？」

その光景を見ていた一人の女声が、人をゴムマリののように弾き飛ばすという荒業をやつてのけた人物に冷や汗をかきながらそう話しかけた。

そして、当の本人もやりすぎたと思ったのか、少しだけ慌てて吹き飛ばした相手のところに駆け寄っていく。

「あー、死ぬかと思った」

だが、心配して駆けつける人たちを他所に、吹き飛ばされた本人は服が数カ所ほど破れているが、元気よく立ち上がりその声を上げた。

「桂、大丈夫？」

「ああ、服が破れただけで体は大丈夫だよ。だから、そんなに心配
そんな顔しなくていいよ」

吹き飛ばされた男性は、そう言いながら服についたホコリを払い、
一応体に異常がないか軽く動かしていた。ひと通り体を確認し以上

がないことを確かめると、未だ心配そうにこちらを見ている恋と呼ばれた少女の頭を撫でた。

「心配しなくても大丈夫だって」

「…うん」

桂の言葉を聞いようやく安心したのか、やっと恋は笑顔を浮かべ次の瞬間には周囲に可愛らしい音が響き、桂が音の発信源を見るとそこには顔を赤くした恋がいた。

どうやら、音の正体は空腹で鳴った連のおなかの音だったようだ。

「もうそんな時間なのか。文遠さん、俺たち昼ごはん食べに行きますけど、一緒に行きませんか？」

桂が声をかけたのは『張遼 文遠』個人の武にも秀でているが、騎馬隊の指揮をさせれば対力でもトップクラスの人物でもある。

「ええなあ。二人がええんやつたらお邪魔させてもらえるか？」

「俺から声をかけたんですから、邪魔なわけ無いですよ」

「…恋もいい」

「せやったら、一緒させてもらおか」

話がついた三人は、鍛錬場を後にしお昼ごはんを食べるために行きつけの店に向かって移動を開始する。その道すがら三人はここ最近あったことを話していたのだが、道行く人の中には桂に向かって奇異の視線を向けるものが多い。

だが、それも仕方が無いといえば仕方のないことで、頭には編笠を目深にかぶっているために顔は口元しか見えず、着ている服は袖が地面につくほどに長く手は隠れており、胴体の部分もかなりだぶついているために体型が全くわからないようになっていた。

どう見ても不審人物である。

だが、この街に住んでいる者にとってはお馴染みの光景のため気になるものは誰一人おらず、逆に声をかけてくるものが多いほどだった。

「それにしても、相変わらず怪しさ丸出しの格好やな自分」

「そうかな？」

「…桂は怪しくない」

桂としてはもう何年もの間している格好なため、特に自分の格好が怪しいとは思わないのだが、普通に考えれば街を守る兵隊さんに捕まってしまうほどに怪しい格好である。

その後、昼食を済ませ三人はそれぞれの仕事をこなすためにそれぞれの持場に移動をしていた。

「次の竹簡をお願いします」

桂は目の前の竹簡を処理している。

「次を」

処理している。

「次」

処理。

桂は竹簡を処理しながら昔のことを思い出していた。

桂こと、荀攸公達はあの日、最愛の人物である桂花こと荀？文若を助けるために崖から落ちた時、落ちたのが河だったこともあり、なんとか死なずに済んでいた。

だが、本人に意識はなく一週間以上寝込み生死の境を彷徨っていた。そんな桂を助けたのは恋こと呂布奉先でだったのだ。

だが、意識を取り戻したあと桂は自分の故郷に帰ることはなかった。河から落ちたときに頭でも打っていたのか自分の真名と日常生活に関すること以外のことを忘れてしまっていたのだ。

そんな行く宛のない桂を、恋とその親代わりである丁原という人物は手厚く保護し、記憶が戻るまでは自分たちのところにいればいいといったのだった。

桂は自分でできることを手伝いながら記憶が戻るのを待ち、助けてもらった恩返しとばかりに自分にできることは率先してやっていた。

その合間を縫って自分を知っている人がいないか探したりしていたが、結果は芳しくなくその状態が二年ほど続いた。

桂が奇妙な格好をするようになったのもこの頃からで、桂は賊の頭に傷を付けられたのが痕として残り、鼻と目のちょうど中間地点あたりに真一文字の傷跡がついてしまったのだ。

それを見た子供が怖がってなっていました。ことから、桂はその傷跡を隠すように帽子を目深にかぶったり、訳のわからない被り物をするようになったしまったのだった。

そんな桂だが、ある時なんの前触れもなく自分のことをすべて思い出した。自分の名前、出身地、なぜ死にかけていたのかを…。

桂は記憶が戻ると丁原にそのことを説明し、すぐに故郷のことを話し連絡を取りたいといったのだが、次に丁原から発せられた言葉を聞き啞然としてしまった。

『その村は今はない』

最初わが耳を疑った桂だったが、丁原の話聞き進めていくうちにその顔には僅かだが希望の色が浮かんでいた。

桂が行方不明になった少し後、桂のいた村は大規模な賊に襲われたのだった。人の被害は少なかったのだが村は大きな被害を受けてしまい今までのように維持することができなくなってしまったのだ。

そのため、村人たちはあるものは伝手を頼り、ある者は新たな村へと身を寄せ、桂の家族もその時にばらばらになってしまったのだった。その時に死んだ村人は全員が男性で、女性半一人もいなかったらしく、そのことから桂花が無事だということがわかったのだ。

『生きていればまた会える』

桂はそう考え、自分が旅するのにも今の状態では野垂れ死ぬことは目に見えているので、丁原に頼み職を紹介してもらい、恋に頼んで稽古をつけてもらうことにした。

そして、丁原から与えられた職は洛陽の都で文官をすることであり、恋は丁原の推挙で黄巾賊討伐などで名を上げ始め、昔からの知り合いでもある董卓に仕えることが決まった。

董卓軍は今現在洛陽の街に滞在しており、董卓軍が来てから洛陽の街は以前以上の活気を取り戻していた。

桂は仕事をする傍ら家族や桂花の居場所を探し、さらに相手時間には恋に稽古をつけてもらっていた。その甲斐もあってか、桂の腕前は瞬く間に上がり無手の腕前はかなりのものとなっていた。

更に、気の使い方も上達し最近では勝てないまでも三国一の武を誇ると言われる恋相手に、勝てないまでもかなりいい勝負が出来るようになっていた。

そして、記憶を取り戻してから一年後には家族に再会することができた。桂の無事を知った家族は泣いて喜び、桂も同じように泣いていた。

だが、桂花の居所はわからず、一時期袁紹軍にいたという情報を最後に足取りをつかむことができなくなってしまったのだった。

だが、両親からも桂花は無事だということを確認できたので、桂はそろそろ本格的に桂花を探そうと考えていた。

だが、そう思っていた矢先、丁原が病に倒れてしまった。以前から体調がおもわしくはなかったが、突然血を吐いて倒れてしまったのだ。

そして、桂は病に伏せる丁原から恋と董卓の助けになってやってくれと頼まれたのだった。

返しても返しきれぬ恩を丁原に感じている桂はその申し出を受け、

丁原が病で亡くなった後恋を補佐し、董卓軍が洛陽の街を復興するのに尽力しているのだった。

「ねえ桂、聞いてるの？」

「ん？ おお、詠じゃないですか。こんな所でなにしてるんですか？」

「ここは僕の執務室だけど、こんな所で悪かったわね。それに、あんたこそ何ぼうつとしてるのよ。人の部屋に報告書持ってきたと思ったら、人がいくら呼んでも返事もしないんだから」

「これは失礼しました。少し昔のことを思い出していたんです」

桂はそう言いながら申し訳ないと頭を下げた。

「まあいいわ。いくらぼうつとしててもあんたが仕事の手を抜かないことはよく知ってるからね」

「そう言ってもらえると助かります。では、失礼しました」

そう言っ出ていく桂を、詠は黙って見送るのだった。

詠こと『賈馱 文和』は董卓軍の軍師である。董卓からの信頼も厚く、その智謀、特に人心掌握術などに優れている。

そんな詠と桂は中が良い。一緒に仕事することも多く、それ以外でもよく話をしてる姿がいろいろな人に目撃されている。

「ん？」

詠の執務室から立ち去った後桂は城内をブラブラと散歩していると、

鍛錬場の方から武器と武器が激しく打ち合う音が聞こえてきた。桂が音のする方に歩いて行くと、恋と張遼が模擬戦をしていた。だが、二人から発せられる気合は本物であり、さもすれば本当の真剣勝負にも見える。

事実、油断して一撃をもらつようなことがあれば間違いなく大ケガをするだろう。

「もろたで！」

「…」

張遼の一撃を恋は無言で弾き返すと、次の瞬間には怒涛の攻撃を仕掛け、その攻撃が終わると張遼愛用の武器、青龍偃月刀がはじき飛ばされていた。

「くうー！？ また負けてもつた！」

「…霞、前より強かった」

「それでもまだ恋には届いてへんからな。嬉しいような悲しいような、複雑な気分やわ」

「でも、恋の言つとおり攻撃の鋭さが以前よりもすごくなってましたよ」

「なんや見てたんかいな」

桂ははじき飛ばされた張遼の青龍偃月刀を拾おうと張遼に近づいていきそう話しかけると、張遼は負けたところを見られて恥ずかしい

のかぶつきらぼつに短く返すのだった。

「でも恋の体のどこからあれだけの力が出ているのか不思議ですね」

「ほんまにそうやで。なあ恋、どうやったらそんだけ力が出るんや
」？」

「……」

張遼がそう聞くと、恋は小首をかしげ考え込み…。

『くうー……………』

答えたのは可愛らしくなった恋のお腹の音だった。

「…やっぱり、沢山食べることですかね？」

「どいつもそうみたいやね」

二人は顔を見合わせてそう言い、恋は恥ずかしげに顔を赤くしているのだった。

第二話 今の日常（後書き）

どうでしょう？

第三話 黄巾賊（前書き）

どうもです。

感想いただいた皆様有難う御座います。ご指摘いただいた点についてはよく考えてみます。

第三話 黄巾賊

「お気をつけてー」

城壁の上から聞こえる声に恋は後ろを振り向き手を上げて答え、張遼は前を向いたまま手だけを上げて答えている。

徐々に小さくなっていく仲間たちの後ろ姿を見ながら、今回獻帝より各地の太守や県令、州牧に発せられた勅命のことを考えていた。

各地では漢王朝に不満を持つ者たちが反乱を起こし、その中でも体の一部に黄色い布を身につけるといふ特徴を持つ黄巾賊は無視できない規模になっていた。

黄巾賊もその姿が確認され始めた頃は、各地で圧政を敷いている太守などしか襲うことはなかったのだが、規模が大きくなるに連れ関係のない村や町を襲うようになっていったのだ。

当初勢いがあつた黄巾賊ではあつたが、各地で官軍などによって討伐されていき、その数を徐々に減らしていった。

そして、黄巾賊は各地で打ち破られ張角がいる黄巾賊は広宗にある城に籠城し、最後の抵抗をしておりそれを討伐せんと各地から様々な軍が集まってきている。

今回董卓軍として戦場に向かったのは武官として恋、張遼、華雄、軍師として陳宮が従軍しており、洛陽に残っているのは董卓、詠、桂、そしてその他大勢である。

主力の武官である三人がいないことに若干の不安を感じている桂だったが、黄巾賊の主力は各地で討伐されており、この洛陽の地まで来ることはないだろうという詠の判断を聞きそれに従うのだった。

「あの三人のことですから心配はいらないと思うんだけど…、まあ無事に帰ってくることを祈るのは個人の自由だよな。そうだと詠？」

「なによ、気がついてたのならそういいなさいよね」

桂が名前を呼ぶと近くにある柱の影から詠が姿を表した。詠は隠れていたことがバレたせいか、不機嫌そうな顔をしていた。

「まあいいわ。それよりこんな所で油売ってないで仕事してよね」

「ん？ 今日の分の仕事は終わらしてたはずだけど？」

「何言ってるのよ、恋と華雄は別としてねえや霞の仕事はみんなで分担してやらなくちゃいけないんだから、もちろんあんたにもやってもらうことが山程あるの！」

腰に手を当て桂に向かって指を突きつける詠の姿は、全身で『なんか文句あるの？』と喋っており、それを見た桂には小さく肩をすくめることしか出来ず、大人しく詠に後ろについて歩くのだった。

「…ところで、今日はいつもより更に変な格好ね」

「そうかな？ 俺的にはかなりお気に入りなんだけどな？」

頭の部分が尖っている袋。それを服と喋っているのかどうかはわからないが、その袋のちょうど口の部分だけ切り取られており僅かに口元だけが見て取れ、体の部分は手を上げると袋の一部が少しだけ盛り上がるのだった。

「そんなに顔を見られるのが嫌なの？」

「俺は別に構わないんだけど、子供たちが泣いたりしたら可哀想だろ?」

桂はそう言つと穴の開いている部分を少しだけ持ち上げ、顔に残る傷跡を詠に見せる。桂の顔に残る傷はそれなりに大きく、桂の少しだけキツイ目付きと相まって顔を隠す以前はよく小さな子供に泣かれたことがあつたのだ。

「まあ、そんなことはどうでもいいとして、ほら早くいこうぜ。董卓様も待つてるんだろ?」

「ちよつと! そんなに押さないでよ!」

そんなこんなで仲の良い二人の声が洛陽の都に響くのだつた。それから数日後、黄巾賊の討伐から三人は無事に戻ってきたのだが、黄巾賊の首謀者である張角たちは見つけることが出来なかつたというのだつた。

だが、黄巾賊は壊滅的な被害を受けこれまでのような組織だつた反乱は起こすことは出来なくなるだろうというのが、諸侯の統一見解であつた。

「お帰りなさい。みんな無事でよかつたです」

「ん…、桂と約束した。みんな無事に帰るつて」

「そつか。俺との約束守つてくれたんだな。ありがと恋」

桂は恋にそう話しかけながら赤い髪の毛を梳くように恋の頭を撫で、頭を撫でられている恋は気持ちよさそうに目を細めている。

「桂殿！　ねねも、音々音も頑張りましたぞ！」

そう言いながら、小さな体を使って一生懸命アピールしているのは『陳宮　公台』真名を音々音と言う少女だった。

「ねねも頑張ったんだな」

そう言うと桂は少し乱暴にねねの頭を撫で、自髪の毛をくしゃくしゃにされながらもねねは嬉しそうだった。

陳宮はよく荀攸に戦術や用兵について指南を受けていた。ねねは能力的には高いものを持っているが、経験が浅いからなのか判断が遅れることがあり、本人自体もそのことを気にしているのか改善するために詠や桂に教えを受けているのだ。

特に用兵の仕方が似ている桂をとて慕っているのだった。

「文遠さんも、華雄さんも無事で何よりです」

「当たり前や。あんな奴らに負けるうちらやないで！」

「ああ、霞の言うとおりだな」

「それでも戦場では何があるかわかりませんから油断大敵ですよ」

桂は少し厳しめの声で二人に注意を促がし、それを聞いて華雄と張遼は互いに顔を見合わせ苦笑いをしている。

「桂、二人共帰ってきたばかりなんだから、それぐらいにしたら？」

「そう、そうやで！　さすが詠はええことゆうわ！　華雄もそう思

「うやる!？」

「そうだな。詠の言うとおりだな」

「説教なら、明日でもいつでもできるんだから、後にしてよね」

張遼と華雄の二人は詠の登場を心より喜んでいたが、最後の言葉を聞いてゲンナリとしたような表情で肩を落とすのだった。

華雄と張遼の二人はよく桂に叱られており、説教をするときの桂の迫力は、桂を慕っている恋とねねをしても裸足で逃げ出すほどのものである。

「そつや、二人共向こうでおもしろい話聞いたで」

桂に説教されると落ち込んでいた張遼だったが、執務室で今回の戦鬪の報告書を作成しながら不意に何かを思い出したように詠と桂の二人にそつ話しかけた。

「面白い、ですか？」

「そつや。二人は『天の御遣い』って知つとるか？」

「噂では聞いたことがりますけど…」

「僕も噂でしか知らないわ」

「うちも向こうに行くまでは噂で聞いた程度のことしか知らんかったんやけど、どうもその話ほんまらしいんや。うちらは今回他の軍と離れたところで戦つとったさかい実際に見たわけやないんやけど。」

どうも、袁術ん所におる孫策つちゅうやつのところにおるらしいで？」

「そうなんですか」

「それで？」

「いや…、二人共気にならへんのか？ 天の御使いやで？」

張遼のその問いに対し、二人は同じように首を横に振った。二人にとってはその天の御使いが自分たちに対し何かをしてきたのなら対策を考えなければいけないと思うが、現状特に被害を受けたわけもないので特に興味はなかった。

「それよりも俺としては文遠さんのこの領収書のほうが気になりますね」

「あら奇遇ね。僕もそれを霞に問いただしたかったのよね」

「「なんで酒屋の飲み代を経費で上げているのか、を…」」

そう言つて桂は張遼の右肩を、詠は左肩をそれぞれこそ万力で締め上げるような力で掴みながら、それはそれはとてもいい笑顔で詰め寄るのだった。

数十分後、どこかのボクサーのように真っ白に燃え尽きた張遼を董卓が発見し、『へう…』という可愛らしい悲鳴を上げることになるのは全くの余談である。

黄巾賊の討伐により、時代は平和を取り戻した、かのように見えた。だが、このことを契機に時代はますます混乱を極め、急速に変化を

始めることになるのだった。

その頃の桂花さん。

桂が行方不明になった後、桂花は自分を鍛えるために旅に出た。旅の途中様々な場所で客将として仕え、様々な人物に合っていた。

世は黄巾賊のために混乱し、決して安全とは言えなかったがそれでも旅の途中にもしかしたら桂に会うことができるかもしれないとも考えていた。

「見つけたら絶対に文句行ってやるんだから。私が一人で旅しなくちゃいけないのは桂のせいなんだから！」

桂花は自分に与えられた部屋のベッドの上で、桂との唯一の思い出の品といってもいいひび割れたメガネを胸に抱きながらそう呟いた。今現在桂花がいるのは『曹操 猛徳』が治める陳留だった。曹操の所に仕官する前は『袁紹 本初』の所に客将としていたのだが、そのあまりの行動にとつと客将を辞め、世間でも評価の高い曹操のところへとやってきたのだった。

曹操のところへ仕官するときに一悶着あったが、無事に仕官することができ色々仕事を任されることになった。

さらに閨にも誘われたが、それは丁重にお断りしていた。曹操は男嫌いとは聞いていたが、まさか閨に誘われるとは桂花は思ってもいなかった。

桂花も男は嫌いだが、ただ一人だけ、心に決めている人物がいる。

「…会いたいよ、あつて声が聞きたいよ、桂…」

そう言つて桂花は呟き、静かに涙を流すのであった。

第三話 黄巾賊（後書き）

いかがでしたでしょうか？

第四話 ？水関の戦い（前書き）

どうもです。

感想いただいた皆様有難う御座います。

感想に対する答え

主人公の名前の読み方は「けい」であっております。

一刀君は、原作以上スーパー一刀くん未満です。ボツシュートはされません。

ご報告

タグについてですが『主人公無双』 『主人公文武両道』に変更

『一刀君呉ルート』を追加

第四話 ? 水関の戦い

「まったく…、こんなことをしている暇があるのなら、少しでも黄巾賊たちの残党を何とかしてほしいですね」

? 水関の上から反董卓連合軍を見ながら、桂はそう呟き小さくため息を吐いていた。

事の起こりは袁紹が各地の諸侯に向けて檄文を飛ばしたことである。桂はある伝手を使いその内容を確認したのだが、それを読んだ桂は思わず鼻で笑ってしまった。

『皇帝を蔑ろにし、洛陽において圧政を敷くだけでは飽きたらず、官の大粛清まで…』

荀攸はそこまで読み、思わずその文を握りつぶしてしまった。董卓軍が洛陽に来るまで都のはずの洛陽は本当にひどい有様だった。

宦官は民を蔑ろにし、皇帝は傀儡にされ誰もが己が保身しか考えられず、洛陽は廢都のような有様だったのだ。

その洛陽を董卓は私財を投げ込んでまで復興させ、今の洛陽は昔以上の活気を取り戻していた。

今回の反董卓連合は、大粛清をのがれた誰かが袁紹を唆したんだろうと桂は考えていた。だが、連合の結成理由はどうであろうと、この状況は董卓軍にとってかなりまずいものとなっていた。

仮に負ければ連合は問答無用で董卓を殺すであろうし、仮に今回連合を退けたとしても二回目、三回目の連合が生まれ、いつかは負けしてしまうだろう。

結果、連合を組まれた時点で董卓軍の未来は決定してしまったよう

なものなのである。

「だからといって、むざむざ董卓様を殺さすなんてことはさせないけどね。華雄さんも、そう思いますよね？」

「無論だ。己の利だけを求め、月様に仇なそうとする輩などに負ける気はない」

桂が話しかけたのは共に？水関を守る華雄であった。『華雄 葉穎 董卓軍にあつてその武勇を諸侯に知られている豪傑である。』

華雄の真名に関しては自分の夫となるもの以外には教えないと言っているため、董卓軍の誰も華雄の真名は知らなかった。

そして今回の反董卓連合に対し、軍師である詠は？水関の大將を華雄、その軍師として桂を指名し、その後ろにある虎牢関には恋、ねね、霞を配置して連合に当たることにしたのだった。

「華雄さん、とりあえず俺たちは相手を足止めするのが目的です。間違つても打つて出ないようによろしくくださいね？」

「む…、しかし「しかも案山子もありません。荀子曰く『死を軽んじて暴なるは、これ小人の勇なり。』」

死を重んじ、義を持たしたゆまざるは、これ君子の勇なり』です」

…………… わかった」

桂の言葉に、華雄は渋々と、本当に渋々と言った感じにそう答えると愛用の武器を肩に担いで別の場所へと移動して行くのだった。

去っていく華雄を見送った後も桂はその場に残り特に見える連合軍を見て、とくにそこにある一つの牙門旗に『曹』の字を見つけた。

桂が各地に放っていた細工の一人から、曹操軍のなかに桂花らしい

人物が仕えているという連絡が入り、董卓の許可をもらい会いに行こうかと考えていた矢先、反董卓連合が結成されてしまい桂花が本場に曹操のところにいるのかを確認することができなかったのだ。

「桂花…」

桂は小さくそう呟くと自身も華雄の後を追って砦の中へと入って行くのだった。

翌日、連合軍は？水関に対し攻撃を開始し華雄と桂は各部隊に支持を出しながら、手堅く？水関を守っていた。

もともと砦などに籠城する敵を相手にするには三倍の戦力が必要だと言われている。？水関には地形の関係で大群で攻めるのが難しくなっており、離れた敵には矢が射かけられ砦に取り付いた敵は上から石を落とされて下に落とされていき、連合軍の被害は馬鹿にできないものとなっていた。

「敵が引いていくようですね」

「そうだな。だが私はこんなふうに亀のように閉じ込まれるやり方は好きになれん」

「華雄さんはそれでいいと思いますよ。ですが、今回は董卓様のために我慢してくださいね」

「ふん、そんなことはわかっている。？一人だけこちらに向かつて来ているな」

「あれは劉備軍の…、関羽さんですかね？」

桂の言葉通り単騎で？水関に向かってきているのは長い黒髪が特徴

の女性『関羽 雲長』だった。桂の調べた所では関羽が所属している劉備軍は兵士の数は連合の中で最も少ない。

だが、そこに集まっている人材に関しては桂はかなりの警戒が必要と考えていた。將軍として仕える関羽、張飛、趙雲、この三人は部隊の士気などはまだ粗いところもあるが、個人の武においては相当なものであると、報告を受けている。

さらに、軍師として仕えている二人、『諸葛亮 孔明』『鳳統 士元』の二人は伏龍鳳雛とも呼ばれ、あの司馬徽のもとで学んだものの中でも特に優秀との話を聞いていた。

そして関羽は皆の前までくると、華雄に向かって挑発を開始し、華雄は関羽の言葉に顔を真っ赤にして小さく震えている。

「すみません。賈馱に伝令をお願いします」

華雄への挑発が続く中で桂は伝令のものに声をかけ、自分はその場で墨と竹簡を取り出しサラサラと内容を書いていく。

「？水関を破棄します。虎牢関の備えを十分にしておいてください。？水関の破棄は私の独断でありお叱りと罰は如何様にも受けません。其の旨をしたためてありますので、必ず賈馱に届けてください」

伝令はその内容に驚いたものの、すぐに竹簡を懐にしまつと急ぎこの場を離れていくのであった。

「荀攸…」

「華雄將軍、人には誰しも譲れないことがあります。もちろん私もあります。ですがこれだけは忘れないで下さい、絶対に自分の命を無駄にしないこと、万が一勝てないとわかった場合は絶対に逃げて

ください」

「…すまん」

荀攸は華雄の言葉に頷くだけで何も言わず、それぞれの部隊にてきはきと指示を出していく。

「家族のあるもの、死にたくないものは虎牢関に下がちなさい！
だが、我らが華雄將軍の武を貶めた連合を許せないものは私と華雄
將軍に続きなさい！」

系がそう声をかけたのだが、？水関からは一兵もさる様子がなく、
その光景に桂は困ったように頭をかくのだった。

「みんな馬鹿ばかりですね。ですがその思い、私は嬉しく思います。
ただし！ 今から呼ぶものは虎牢関に下がちなさい、それが聞けな
いというのであれば、この場で除隊を申し付けます」

桂はそう前置きをすると、次々に名前を上げていく。

「今呼んだ者たちは年老いた親がいるもの、まだ小さな子供がいる
もの、最近結婚したばかりの者たちのはずです。此処から先の戦い
は私の独断ですので、それに付き合わせることはできません。…そ
の気持ちだけいただいております」

桂に名前を呼ばれた者たちの中には涙するものも多く、それぞれが
感謝の言葉を残し虎牢関へと移動していった。

「華雄將軍、？水関は私の部隊が守ります。華雄將軍は思うままに
戦ってください」

「わかった。必ずお前の期待にそう働きを見せると約束しよう！
華雄隊行くぞ！」

「荀攸隊は砦を守ります！ 華雄將軍たちが戻ってくるまで誰も通
さ無いようにします！」

二人の掛け声を聞いて兵士たちから咆哮が上がる。隊の士気は全く
下がっていないようだった。そのことを確信し、武官に細かな指示
を出し自身も隊の指揮をとるために砦から出るのであった。

「今です！」

？水関から打って出た董卓軍に対し、連合軍はこれ幸いと攻撃を仕
掛けてきた。関羽と華雄の一騎打ちは関羽が勝ったのだが、華雄は
桂との約束通りsの場で一騎打ちにこだわって死ぬようなことはな
く、個人の武で勝てないと判断し、華雄隊は華雄の指示の下数で勝
る連合軍を相手に優位に立ちまわって見せ、その姿はまさに歴戦の
勇士といった感じだった。

砦を守る荀攸隊は、相手の動きに合わせ弓を絶好のタイミングで放
ち勢いを殺しながら、近づいてくる敵の数を制限して砦への侵入を
許さなかった。

「そろそろ限界ですかね。華雄將軍に伝令を！ すぐに関を抜け虎
牢関へと退却するべし、と！ 私は最後の仕上げをしてから虎牢関
に向かいます、そう伝えてください」

桂は、自分の部隊に指示を出しながらも、仲間の部隊を逃がすため

に前線で戦っていた。

「あの変な姿をしている奴を倒せ！」

「変な姿とは心外ですね」

敵兵の言葉に桂は心底心外だという感じでそう呟き、それでも服の中から取り出した短刀を投げつけ、的確に相手を殺していた。

だが、敵兵の言葉も仕方ないだろう、なぜなら今日の桂の姿は魔女がかぶるようなトンガリ帽子を目深にかぶり口元しか見ることが出来ず、体は黒のローブに覆われていて体型が全くわからないようになっていた。

そして、そんなローブの中から短刀やら爆竹やら矢などが飛び出してくるために、迂闊に近づくことハリネズミにされてしまうのだった。

「荀攸様！ 孫旗と曹旗が近づいてきます！」

「孫、と言うことは孫策さんですかね？ そうだったら不味いですね…。華雄將軍は？」

「先ほど殆どの兵を率い虎牢関へと向かわれました！」

「そうですね。では予定通り、？水関を破棄し荀攸隊も撤退します」

桂はそう部隊に指示を出し自身は殿を務めながらも最後の策を成功させるために、敵をギリギリまで近づけさせる。

すると、部隊なんかから二人の女性が桂に向かって近づいてきた。その二人の後ろでは、両軍の将が心配そうに二人を見ているのだった。

「あなたがこの部隊の指揮をしていたの？」

「私はしがない文官ですよ。孫伯符殿」

「私にはとてもそうは見えないけれど？」

「それでも事実は事実ですからどうしようもありませんよ曹孟徳殿」

「まあ、いいわ。それで？ 文官が最後まで残って何をしているのかしら？」

「実は個人的に猛徳殿にお聞きしたいことがありますね。あなたの軍に荀？文若がいるとお聞きしましたが、本当ですか？」

「それを聞いてどするつもりかしら？」

「もしいるのならばお伝えいただきたいのです。『寂しい思いをさせていたらごめん。でも、今でも昔のように愛してる』荀攸がそう言っていたと。お願いできますか？」

「さあどうかしらね？」

「そうですね。ならば仕方がないですね。そうだ、話を聞いてくださったお礼にいいことをお教えいたしましょう。この関はもうすぐ焼け落ちます。それ以外にも少し策を仕掛けておりますので、部隊に被害を出したくなければ後ろに下がることをお勧めいたします。ではお二人とも、いつかまた」

桂がそう言うと、砦のあちらこちらから火の手が上がり関の前に集まっていた連合軍はパニックに陥ってしまった。

孫策と曹操も、一瞬だけその騒ぎに気を取られてしまい、その一瞬のうちに桂は火の中に向かって馬を走らせ、すぐにその姿は煙と炎によって見えなくなるのだった。

関から上がった火はすぐに連合により消されたのだが、関には食料などは全く残されておらず、さらには夜になると再度火の手が上がり、関の内部にいた袁紹軍と袁術軍に少なからずの被害が出た。

こうして？水関は連合軍によって占拠されたのだった。

その時の桂花さん。

夜になり？水関から火の手が上がった頃、曹操はその報告を聞き桂花を自分の所に呼んでいた。

「華琳様どうかされましたか？」

「少しあなたに伝えたい事があるのよ。『寂しい思いをさせていたらごめん。でも、今でも昔のように愛してる』荀攸って名乗った人物がそう言っていたわ」

荀攸の名とその内容を聞き桂花は一寸啞然とし、次の瞬間にはその場にへたり込み目の端に涙を溜めながら喜んでいた。

「あなたが私の閨に来ないのはその男が理由なのね？」

「はい…」

「そ、まあいいわ。私は確かに伝えたわよ」

「ありがとうございます華琳様」

桂花は立ち上がって曹操にそう告げると、しっかりとした足取りで自分の天幕へと戻っていき、曹操はその後ろ姿を見ながら桂花を自分の閨に誘った時のことを思い出していた。

「残念ですが私にその気はありません。華琳様のことはお慕いしておりますが、そのようなことは考えてもいません」

「そう。でも私にいうことを聞かなければ必要ないと言ったらどうするの?」

「それでも構いません。そうなったのなら曹孟徳という人物がそれだけの器であり、私の人を見る目がなかったということですから」

「貴様！ 華琳様を愚弄するか！」

「うるさいわね！ この脳筋！ 誰も華琳様がそうだと言ってないでしょう!？ 仮の話しよ、仮の!」

大剣を抜き放ち桂花に斬りかかろうとする女性は、魏武の大剣と言われる武将『夏侯惇 元嬢』だった。

「春蘭剣を納めなさい」

「ですが華琳様!？」

「私は納めなさい、と言ったはずよ？」

「うつつ…、分かりました」

「桂花悪かったわね。戻っていいわ」

というやり取りが交わされたのだった。曹操自身は才能あるものと美しいものを好み、それは男性でも女性でも変わらなかった。ただ、今の時代優秀な武将たちはほとんどが女性であり、男性の中に見所のある人物がいなだけで、決して男性が嫌いだと言っわけではなかった。

「荀攸、ね。面白いわね」

曹操の呟きを聞くものはこの場にはいなかった。

一方自分の天幕に戻った桂花は簡易ベッドの上で顔を布団にうずめながら足をバタバタとさせていた。

「生きてた…、桂が生きてた。それに、愛してるって…」

先ほど曹操から聞いたことを思い出し、また顔を赤く染てばたつかせている足のスピードが早くなっていく。

そうしながらも、桂花は董卓軍にいる桂をどうにかして無事に助けたそうと頭を働かせるのだった。

第四話 ？水関の戦い（後書き）

いかがでしたでしょうか？

第五話 虎牢関の戦い、荀攸の策（前書き）

どうもです。

感想いただき有り難うございます。

第五話 虎牢関の戦い、荀攸の策

「それで？　？水関を破棄したことに対して何か言い訳はある？」

？水関を破棄し、虎牢関まで撤退した桂を待っていたのは、城門で仁王立ちしていた詠であった。そのあまりの迫力ととてもいい笑顔に、荀攸隊の面々も桂自身も冷や汗を流すのを止めることが出来なかったという。

そして、桂が門のところまでやってくると、詠は無言で桂の首根っこを捕まえると、関の中へと引きずって行きそう尋ねたのだった。

「ありません。？水関の破棄は私の独断で行いました。それも我軍にとつて不利になることもわかっていた上です」

「そう、言い訳はしないのね。ならば、荀公達には？水関破棄の罰を受けてもらうわ」

「…」

詠の言葉にこの場に集まっている張遼、恋、ねね、華雄の視線が集まる。特に華雄はなにか言いたいのを必死に我慢しているようだった。虎牢関に戻る途中、桂は華雄に対し？水関破棄の責任はすべて自分にあると言い、虎牢関で何があっても決して口を挟まないようにと言われていた。

もちろん華雄はそのことに対し文句を言ったが、桂は聞き入れずやむ無く華雄はその条件を飲んだのだ。だが、事ここにいたってとうとう華雄は我慢できなくなったのか、詠の前に飛び出そうとした。のだが、それよりも早く部屋の中に大勢の人間がなだれ込んできた。

「なに？ 今は会議の途中よ？」

「恐れながら賈馱様に申し上げます！ 我ら？水関の守りについていたものを代表してやって参りました！ どうか荀攸様を許していただけないでしょうか！」

その場になだれ込んできたのは荀攸隊の面々、？水関の守りについて部隊の代表者たちだった。

「みんなありがとうございます。ですが、私は自分のしたことについて責任を取らなければなりません。誰しもが自分の思うままに行動し、それを咎めることができないようであれば、それは賊と変わらないのですから。ですが、みなさんの気持ちはとても嬉しく思います」

桂は兵たちに振り返ると、大きく頭を下げてから詠の方に向き直った。

「うちの隊の者が迷惑をおかけしてすいません。これも私の不徳のいたすところ、彼らの罪はそれをさせた私の罪です。何卒、彼らには寛大な心を持っていただきたく思います」

「そう、彼らの責も自分が負うというのね？」

「はい」

「なら仕方ないわね。今回荀攸が？水関を破棄したのは荀攸の直接の上官である僕の指導不足でもあるということになるわ」

詠の言葉を聞き、その場にいる全員が驚きの表情を浮かべている。

「よつて、荀攸及び？水関を守備していた部隊に関しては、虎牢関での連合との戦いにおいて前線に出てもらうわ。もちろん僕自身も、虎牢関で直接指揮を取るわ」

「詠…」

「別にあんたのためじゃないんだからね！ 月からも、そういう支持が出てるの！ それに、あんたが華雄のためを思って兵を動かしたことぐらいわかってるわよ」

照れたようにしながらそういう詠に対し、桂は少しだけうれしそうに微笑んだ後、最上級の礼の姿を取り後ろにいた兵たちも同じように礼の姿を取る。

「ちょ！？ そんな事しなくていいの！」

「いえ、賈馱様に拾っていただいたこの命、必ずや役に立たせてみせることを誓います！」

桂たちの言葉に詠は顔を真赤にし「しらない！」とだけ言い残して自分の部屋へと帰って行ってしまった。桂たちはそんな詠を見送った後、桂はこの場にきた兵たちに礼を言い、二時間後に訓練場に集まるように伝言を頼んだ。

「荀攸…、私のためにすまなかった」

「華雄さんが謝ることなんてなにひとつありませんよ。華雄さんは私との約束を守り、この場においてくれるのですから」

「それでも華雄は礼をいいたいんやろ。桂は華雄の武人としての心を大事にしてくれたんや。確かに？水関では連合に負けてもうたけど、あのまま関に籠って勝つとつても華雄の武人としての心は死んどったかもしれないからな。それに、連合にはこの虎牢関を破ることは出来へん。なんせうちら全員がおるんやからな、そうやる恋？」

「…ん、桂と華雄いじめた奴、許さない」

「そうですね！ 連合などけちよんけちよんにしてやるのです！」

そんな頼もしい仲間の言葉を聞き、桂は知らず口元に笑みを浮かべているのだった。それから数時間後、桂は虎牢関で連合を迎え打つ準備を進めながら、もう一つ別の作戦を詠に進言していた。

これは、連合が攻めてくるといふ情報入手した時から考えていたことなのだが、ことここにいたりようやく桂も決心することができたのだ。

「ねえ桂、本当にこんな事するつもり？」

「ああ。おあつらえ向きに私が独断専行で？水関を破棄したということ、詠から処罰を受けたという話も尾ひれ背びれをつけて連合側に伝わっているようだから、こちらの予定通り進むと思う」

「でも、受け入れ先はどうするつもり？ 言っておくけど僕はともかく月を利用するようなところは却下よ？」

「それも問題ない。今現在、劉備軍の軍師と話をつけているところだ、但し華雄さんと華雄隊のみならず一緒に劉備軍に合流してもらうことになるだろうけど」

「恋とねね、それに霞とあんたはどうするのよ」

「恋とねね、文遠さんには自分のしたいようにしてもらおう。どこかの軍に降るならそれでもいいし、董卓様について劉備軍に入ってもらっても構わない。まあ俺としては董卓様と詠の護衛として劉備軍に行ってもらいたいんだけどね」

桂の説明を聞き、詠は怒ったような表情で桂に話しかける。

「あんたは？ その説明にあんたのことがないじゃない！」

「俺は宮廷で圧政の限りを尽くした逆賊董卓とそれに加担した軍師賈馱を殺すという役目がある。この役目は今の状況では俺が一番適任だからな。その後のことは俺にもわからない。最悪、討ち首になるかどこかに幽閉されるか、運が良ければ生き残れるんじゃないかなと、まあそんなところかな」

そう話す桂の声からは絶望や諦め、後悔などの感情は一切感じられずそれが出来れば本望だ、ということが詠にはわかってしまった。

「どうして…、どうしてあんたがそこまでするのよ？ 僕達を生かしてあんたが死んだら意味が無いじゃない!？」

「そんなことはないぞ詠、意味ならちやんとある。私は丁原様にこの命を助けられて今ここにいらることができんだ。そして、その丁原様に董卓様たちを頼むと、そう言われている。この時以上に役が立てる日が来るとは俺には思えない。もっとも、こんな事で丁原様への恩が返しきれとは思っていないが、それで少しでも返せるのなら、それこそ俺の望むところだよ。それじゃ、そろそろ連合も来ると思うから、詠は董卓様に上手いこと伝えておいてくれ」

桂はそれだけ言うと、えらく裾の長い服を引きずりながら詠の部屋から出ていき、その場に残された詠は「桂の…、馬鹿」と、小さく呟くのだった。

そして、詠の部屋から自分の部屋に戻った桂は自分の部屋で動きやすい服に着替えると、兵士たちが集まっている場所へと移動する。

「…」

「…」

「…」

「どうしたんですかみんな？ そんな鳩が豆鉄砲を乱射したような顔して？」

そんな物騒な鳩は御免被りたいと思いながらも、兵士たちはいつも変な格好をしている桂が更に変な格好になっていることに、目を丸くして呆然としている。

何故ならば、今の桂は虎。虎になっているからだ。

「荀攸様、その被り物は一体なんなのですか？」

「この虎牢関での戦いは熾烈を極めると思いますが。ですので私も動きやすい格好にしたのですけど、変ですかね？」

その場にいる全員が変だと思ったが、それでも普段の格好からすれば何倍も動きやすいその姿に、桂の本気を見て取ったのか誰も声に出すものはいなかった。

今現在、桂は頭に虎を模したマスを被り、体の部分は体のラインが

よくわかる薄手の服を着、袖の部分はいつものように地面につくぐらいに長くなっている。

下半身は霞が履いているような袴を見につけ、普段に比べれば格段に動きやすい格好となっていた。

「皆さん、連合とこちらの戦力はほぼ互角です。虎牢関があるかぎり負けるとは思えませんが、万が一我らが負けるようなことがあれば、命を無駄にせず曹操、孫策、劉備のこの三つの軍のどれかに投降してください。決して、下手な扱いは受けたいはずです」

その後、今後の作戦をここにいる兵たちに伝え、桂は別の場所にいる兵たちにも作戦を伝えるために別の場所に移動をしたのだが、その先々でほとんどの兵に虎のマスクのことを聞かれたのだった。

そして、いよいよ連合軍が虎牢関に姿を表し、連合軍、董卓軍共にの緊張に包まれるはずだったのだが、なぜか董卓軍の将軍、霞と桂は連合軍を見をろしながら酒を飲んでいた。

「かーっ！ なんやこの酒！？ めっちゃうまいやないか！」

「私もこれほどとは思いませんでした。丁原様からいただいたアイテムのなんですが、まさかこれほどまでに美味しいとは……」

酒盛りをしている二人は猪の干し肉を食べながら、眼下に見える敵軍を肴にして美味しそうに酒を飲んでいた。事実、桂が丁原から持った酒はその道の人なら知る人ぞ知る銘酒『霸王殺し』だったのだ。

「それにしても暇な奴がようけおるで」

「本当ですね。するべきことはたくさんあるでしょうに」

「まあ、うちのすることは変わらんけどな。それと詠から聞いたんやけど、桂はほんまにええんか？」

「もちろんです。文遠さんは、自分の思うとおりにしてください」

「そか。ん、なんや自分杯が開いとるやないけ」

そう言うと張遼は桂の杯に酒を注ぎ、それを受けた桂も張遼の杯に酒を注ぐのであった。

そんな二人の姿に連合軍からは野次みたいなのが浴びせられるが、二人は気にした様子もなく談笑しながら酒を呑むのであった。

「おっと」

だが、不意に張遼が体を後ろに逸したかと思うと、その手には一本の矢が握られていた。

「へえ、連合の中にも中々の奴がおるやないけ」

「そうですね。では残念ながら酒盛りはこれまでですね」

「続きはアイツらをいてこました後、やな」

「そうですね。この戦いが終わったら、もう一本のとおっておきも出させてもらいますよ」

「ほんまか！？ よっしや、俄然やる気が出てきたで！」

桂の言葉を聞くと張遼はそれまで以上に張り切り、その勢いのまま

自分の部隊に戻っていくのだった。そして、一人残った桂は先程屋が飛んできた場所、曹操の陣営に目を向けた後、自らも自分の部隊へと戻っていった。

そして、連合が虎牢関に攻撃を開始し連合は休むまもなく、波状攻撃をしかけていた。間断なく続く攻撃に守備側の董卓軍は徐々に疲れを蓄積していく、筈だったのだが桂と詠が相手のローテーションの間を見て兵を休ませているため、疲労は思った以上に少なく士気も高いままであった。

逆に、連合側はいつまでたっても皆の一つ落とせないことに苛立ちが募り、各勢力の間で不協和音がはじめていた。それに伴い、虎牢関への攻撃も徐々に荒くなってきていた。

これを好機と見た桂と詠は、更に相手の戦意を挫くために一度虎牢関から打って出ることにした。

「文遠さんは左翼、華雄さんは右翼、恋と私は中央で相手を迎え撃ちます。『勝に急にして敗を忘るるなかれ』とも言いますので、ある程度相手に損害を与えた後は無理をせず虎牢関に引いてください。それと、曹操さんと孫策さんのところは兵も将も屈強なので出来るだけ手を出さないようにしてください。詠、引き際は任せましたよ」

「誰にも言ってるの？ 僕は賈馱文和よ？」

「ああ、頼りにしてる。ねねも詠を補助してください」

「おまかせなのです！」

「それではみなさん行くとしましょう。全軍…、突撃！」

桂は曹操軍、孫策軍、劉備軍が前線から離れたのを見計らい、さらに相手が前線を交代する入れ替わりの隙を狙い、全軍に突撃命令を出す。

「行くで張遼隊！」

「華雄隊でる！」

「…恋も行く」

そして、董卓軍が誇る勇将三人が戦場に華をさかせんと飛び出していく。その姿は味方に勇気を与え、敵に絶望を与え連合の前線はあっという間に混乱に陥っていた。

こうして、虎牢関の戦いは激しさを増していくのだった。

今日の桂花さん。

桂花は不機嫌だった。それは、ここ最近…、いやこれまでの人生の中で一番とっていいほどに不機嫌だった。

昨夜、曹操から桂の言伝を聞き、それこそなにか悪いものでも食べたのかというほどに上機嫌だったのだが、それもつい先程までのこと、今は背中に真っ黒なオーラを背負いながら不機嫌をアピールしていた。

その原因は虎牢関の上で楽しそうに酒を飲んでいる二人のせいだった。殊更、女性の方に厳しい視線を送っている。

「秀蘭、あなた弓が得意だったわよね？」

「ああ、弓には自信がある」

「そう…、だったら少しだけお願いがあるんだけど…」

「どうやら、本能で何かを感じ取ったようだった。」

第五話 虎牢関の戦い、荀攸の策（後書き）

いかがでしたでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2352y/>

真説・恋姫十無双 ~その男荀攸につき~

2011年11月9日02時03分発行